

MUSASHINO Vol.108 for TOMORROW



巻頭

我流の音楽愛

平野啓一郎

海外音楽事情

人生を決定づけた10歳の経験

アリベルト・ライマン

表紙：飯守泰次郎(指揮)

武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団 東京オペラシティ コンサートホール (2013年12月4日)

January 2014
vol.108

謹賀新年

学校法人 武蔵野音楽学園 理事長 福井直敬



皆様には、ご健勝にて佳き初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

一昨年の年末も迫り第二次安倍政権が誕生して、満1年が経ちました。この間、大胆な金融緩和などアベノミクスの効果もあり、また、オリンピックの招致も決まって景況は確かに上向いてきたようですが、東日本大震災や昨年多発した自然災害の復旧、復興、また、防衛、外交問題等、我が国は困難な課題を抱えての年越しとなりました。

教育界へも次々と多くの変革が求められています。大学ポートレートの導入、新しい学校法人会計基準の適用など情報の開示については、学校法人制度を堅持しつつ社会の要求に即した適切な対応が必要でありましょうが、最近とみに言われるガバナンスの枠組みは、歴史、規模、目的等、それぞれが異なる特色を持つ私学には、幅広い自由

な裁量が許されるべきであると思います。

さて、本学園が大学の教育環境の刷新を図る「江古田新キャンパスプロジェクト」は基本構想が固まり、いよいよ実施設計の段階へと進んでまいりました。

近年、交通網の整備、発展に伴い、文化的な趣ある学生街として度々メディアに登場するようになった、江古田の静寂な住宅地との調和を図るよう、新キャンパスは1階掘り下げたサンクンガーデンとし、それをとり囲んで図書館、楽器博物館、食堂・売店等を配置し、教職員と学生・生徒との温かな交流の場を構成します。一方、戦後初の本格的な音響設計がなされた歴史的な音楽堂のひとつ「ベートーヴェンホール」を保存し、その周囲に新モーツァルトホール、オーケストラ・コーラス等関連施設、レッスン棟、練習棟、

事務・管理棟などを機能別に配置し、学生生活の利便性を図ります。

統計によると、日本の学生は先進諸国の中で学修時間が少ないと指摘されておりますが、本学園は、学生・生徒諸君が快適な環境の中で生き活きと充実したキャンパスライフを送り、これが自ずと学修成果の向上につながるよう、新機軸に溢れる学修環境を構成してまいります。

その完成までいま暫くの時が必要ですが、新しい年もハード、ソフトの両面から教育研究内容の充実向上を図り、人格豊かな人材の育成に地道な努力を傾注してまいります。皆様の変らぬご理解、ご支援をお願い申し上げます。



平成28年度末に落成予定の江古田新キャンパス 完成イメージ図

我流の音楽愛

平野啓一郎
(小説家)

2014年第1号の巻頭をお願いしたのは、京都大学在学中の1999年、『日蝕』により僅か23歳という若さで芥川賞を受賞された平野啓一郎さん。少年の頃からピアノを習ったり、エレキギターに熱中したり、さまざまな音楽と親しんでこられたご様子。クラシックにも造詣が深く、とりわけショパン好きとしても知られてい



平野啓一郎 Keiichiro Hirano

1975年、愛知県生まれ。北九州市出身。京都大学法学部卒。1999年在学中に文芸誌「新潮」に投稿した『日蝕』により第120回芥川賞を受賞。以後、数々の作品を発表し、各国で翻訳紹介されている。著書は『葬送』、『滴り落ちる時計たちの波紋』、『決壊』、『ドーン』、『かたちだけの愛』、『モノローグ(エッセイ集)』、『ディアローグ(対談集)』など。近著は、新書『私とは何か「個人」から「分人」へ』、長篇小説『空白を満たしなさい』。

【主な受賞歴】

芥川賞(第120回、平成10年度『日蝕』)、京都府文化賞 奨励賞(第18回、平成12年度)、芸術選奨文部科学大臣新人賞(第59回、平成20年度『決壊』)、ドゥマゴ文学賞(第19回、2009年『ドーン』)、福岡県文化賞 創造部門(第19回、平成23年度)

ます。平野さんの音楽遍歴、小説と音楽の関わりなど、音楽を学ぶ者に興味深いテーマで原稿をお寄せいただきました。

読書と音楽鑑賞

趣味についてよく人に尋ねられる。私の場合、読書は常に掛け替えのない趣味だったが、それと同じくらいに重要だったのが、音楽鑑賞だった。

私は、自分が文学が好きになったきっかけをはっきりと覚えている。既に方々で書き散らしてきた話だが、14歳の時に三島由紀夫の《金閣寺》を読んでショックを受けたのが最初で、それ以前は、一応本を読みはするものの、大して面白いとも思っていなかった。

しかし、音楽は、もっとうんと早くから好きだった。そして、私は最近、いつからということを考えるのを諦めた。というのも、自分の2歳になる長女を見ていて、その始まりが、物心つくより遥かに前のことだと知ったからである。

とにかく娘は、音楽が好きで、妻が買い与えた4枚組の童謡のCDを、閉さえあれば聴いている。何十という曲が、どのCDに入っているかをよく覚えていて、自分でCDを入れ替えては、再生ボタンを押して待ち構

えている。それでも、お目当ての曲を呼び出すことまでは出来ないのも、あとは私が、ジュークボックスのように、リクエストに応じ続けるのである。

子供だからと言って、必ずしも単純ではない。いつも同じ曲が好きかと言えばそうではなく、今日はコレが聴きたい気分というのがあるようで、満足するまで何度でも同じ曲を聴いている。お陰で私は、この歳になって随分と童謡に詳しくなった。

音楽を好きになる背景

娘だけを見ていると、ひょっとして、何か特別な音楽の才能でもあるんじゃないかという親バカな考えが萌してくるが、保育園で他の子供達を見ていても、やはり同じである。みんな「おうた」が好きで、笑顔で手を叩いては合唱している。娘も含めて、



▲ 武蔵野音楽大学 入間キャンパス



▲ 本学管弦楽団合唱団演奏会リハーサル風景 指揮：飯守泰次郎氏
(2013年12月4日/東京オペラシティ コンサートホール)

大半はまだ言葉さえも覚束ないのである。

私が自分について記憶している限りでは、最初に聴いていた音楽は、アニメや特撮物の主題歌だった。物心つく頃には、その手のレコードやカセットが溢れていて、それに合わせて歌ったり踊ったりしていた。

音楽が好きだったのか、それともそれらのアニメ自体が好きだったのかと言われれば、両方相俟ってと言うより他はない。

そういうことは、幼時に限ったことでもなさそうである。

私は例えば、スタンリー・キューブリックの遺作《アイズ・ワイド・シャット》という映画が好きで、あの中で使用されている不気味なピアノのBGMのことが気になっていた。調べてみると、リゲティの《ムジカ・リチェルカータ》だとわかり、早速そのCDを買い求めた。更に、キューブリックが《2001年宇宙の旅》や《シャイニング》でもリゲティの曲を使用しているのを知って、彼の他の作品も集め始め、終には私自身も非常に好きな作曲家になった。

この話には、ちょっとしたオチがある。私は、そんなわけで一頃かなり

を買ったことさえ忘れるほど無関心だったのだ。

音楽は、実のところ、そうした付随的なものに媒介されて好きになる、ということがままある。

苦痛だった ピアノのお稽古

話を元に戻すと、私の音楽遍歴は、しばらくせいぜいアニメの主題歌程度だったが、姉が8歳年上だったせいで、小学校に入った頃からは、随分とマセた音楽を聴くようになっていた。

私が生まれて初めて親に頼んで買ってもらったレコードは———というか、カセットテープだったが———、マイケル・ジャクソンの《スリラー》だった。小学2年の時である。

私はそのテープを年がら年中聴いていて、姉にカタカナで英語の歌詞を書いてもらい、暗記してよく歌っていた。これも、いきなり曲を聴いて好きになったというのではなく、そもそもは、MTVで流されていたあのプロモーション・ビデオに興奮したからだった。

その後、私はいわゆる「洋楽派」に

なって、小学校の終わり頃にはエレキギターを買い、その趣味は今も続いている。必然的にギターが活躍する曲を多く聴くようになり、十代の頃はかなりのロック少年だった。その年代の子供にありがちな話だが、自分の聴いている音楽の素晴らしさを、どうしても人にも知ってもらいたくて、友達にいつも無理矢理にCDを貸したりしていた。

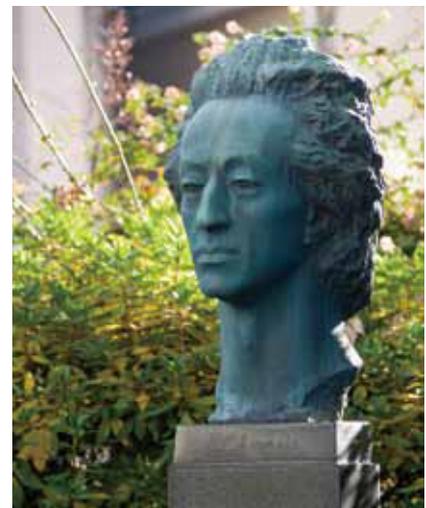
クラシックのCDを自分の小遣いで買うようになったのも、その同じ頃だった。

私の母親は、マニアというほどではなかったが、音楽はクラシックしか聴かない人で、家にもそれなりにレコードが揃っていた。私は、小さな頃から、極自然とそれに耳を傾けていたが、好きというほどでもなかった。

単に聴くだけではなく、私は姉と一緒にピアノを習っていた。今ではどうか知らないが、当時は、ピアノのお稽古ブームで、自宅にピアノがあるというのも、ちょっとしたステータス・シンボルとなっていた。

しかし、私はこのピアノのレッスンが、苦痛で仕方がなかった。

そもそも、私の育った北九州という土地では、男の子がピアノを習うのは、かなり奇異なことだった。私



▲ ポーランド政府より本学に寄贈されたショパン像



▲イリヤ・イーティン教授のレッスン

は、ピアノ教室に行く途中で友達とバッタリ出くわし、馬鹿にされるのが嫌で、いつもスイミング・クラブのスポーツバッグに楽譜を入れて、こっそり通っていたくらいである。

奇跡的なショパン

私は、ピアノの練習も嫌いだったが、ただ、私よりも遥かに根気強く教室に通い続けていた姉が、モーツァルトだのベートーヴェンだのを弾くのを聴くのは好きだった。そして、特に私が好きだったのがショパンである。

どうしてショパンが好きになったのかは、説明するのが難しい。実は、これはリゲティともマイケル・ジャクソンとも違って、何の媒介もなく、ただ直接にショパンの音楽を好きになったのである。そして、私はその後、様々な音楽を節操なく聴き続け、ある時期熱狂した分、いつしか飽きてしまった音楽も少なくはないのだが、ショパンだけは例外で、今までただの一度として「飽きた」と感じたことがない。あれほどまでにキャッチーで、しかも奥深い音楽というのは、ほとんど奇跡的である。

中学生の時に最初に買ったショパンは、ボレットのバラード集だった。なけなしの小遣いで買った当時の——まだ高かった——CDは、どれもそうだが、私はとにかく、このアルバムを聴いて聴いて聴きまくった。ボ

レットは、ショパンというよりリスト弾きとして有名だが、当時はそんなこともまだよく分からず、ただたまたま店に置いてあったので、買ったというにすぎなかった。

演奏家に拘って聴くようになったのは、もう少し後になってからのことである。

私は、ポップスとクラシックをどちらも区別なく聴くようになり、後にはその趣味がジャズにも広がっていった。

私は、完全に我流のギターの練習に明け暮れた。自分でCDを買ってきて、ひたすら耳で聴いて「コピー」する。バンドを組んで、見様見真似で曲も書いてみる。必然的に所有するCDの枚数は増え、殆ど崇拜するほど好きなギタリストがいて、彼らを使用している楽器に関しても、ほとんど滑稽なほどに詳しかった。

同じ感覚で、私は小学生の頃に挫折したピアノの練習に再度取り組むことにした。といっても、改めてピアノ教室に通うのはゴメンで、ただ自分の好きな曲を、好きなように練習するのである。手本は、散々聴いてきた名演奏家たちのCDだった。

私はそれで、モーツァルトのトルコ行進曲だとか、ショパンのプレリュードの《雨だれ》だとか、極簡単な曲くらいは弾けるようになった。弾けると言っても、もちろん、表現云々以前のレヴェルだが、それでも、弾こうと思えばショパンは弾けるんだという

のは、ちょっとした発見で、ピアノの練習はこの頃から急に楽しくなった。

そうなるって、初めて気づいたことだが、私の周りで高校生くらいまでピアノを習っていた友人たちは、なぜか驚くほど、ピアノのCDを持っていなかった。

ショパンのポロネーズを練習しているのなら、当然、アルゲリッチやポリニのCDを聴いているのだろうと想像するがさにあらず。お手本はピアノ教室の先生だけであり、むしろ、クラシック・マニアで、膨大な枚数のCDを所有している人は、まったく楽器を演奏しない人であったりした。私は、その乖離をいつもふしぎに感じていた。

創作活動への刺激

こうした無手勝流の音楽の愛し方は、私が小説家になったこととも恐らく関係している。というのも、音楽家や画家と違って、小説家になるためには、別に専門的なトレーニングのメソッドがあるわけではなく、誰も彼もが我流でその方法を工夫する以外にないからである。

そもそも、小説執筆には、「練習」



▲本学室内合唱団演奏会 指揮：栗山文昭教授 (2013年9月30日/ベートーヴェンホール)



▲インゴ・ゴリツキー教授のレッスン

という概念がない。何かをすればうまくなるのであれば、私もやりたいところだが、結局は名作をたくさん読み、ぶっつけ本番で書いては考え、という繰り返し以外にはない。

音楽は、単なる趣味に過ぎなかったが、小説家になってからは、半ば仕事に変わりつつある。コンサートやアルバムのレビューを書くこともあれば、ショパン（とドラクロワ）を主人公にした《葬送》という長篇小説を書いたために、ショパン関連のイベントに招かれることもある。この原稿の依頼なども、そうした一つである。

もっと創作に深く関わるところで

いうなら、私は時間芸術としての音楽に、小説とのアナロジーを見て、多くの影響を受けている。

絵画や彫刻が創作のヒントになることもあるが、時間展開の中で、人間の感動を考えるとという意味では、小説はもっと直接的に音楽を参照し得る。

今書いている短篇では、リゲティの《永遠の光》やショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲が登場する。そうして音楽のイメージが先に得られている時には、文体も固まりやすい。

物語は主旋律になぞらえられるし、背景の描写はハーモニーである。変音記号を少しずつ

増やしながら、突拍子もない転調をいかにも滑らかに行うショパンの方法は、小説の場面転換に於いても大いに参考となる。

音楽だけは、純然たる趣味としてとっておきたかった気もするが、その豊富さは結局、小説家としての私の創作意欲を刺激せずにはいなかった。



▲本学ウィンドアンサンブル リハーサル風景
指揮：テリー・オースティン教授

音楽の万華鏡 25

音楽用語としての「節」
— メロディかリズムか —

日本の伝統音楽の世界で、旋律を表すことばに「ふし」がある。「節」「曲」「曲節」などを書いて、「ふし」と読ませる。

「ふし」は、もともとは竹の節のように、植物の幹や莖の盛り上がった部分、区切りになっている部分と言う言葉である。転じて、旋律の一区切り、つまり西洋音楽でいうところの phrase や tune、air を意味する。「ひと節」歌うというような場合がそれに当てはまる。

そこから派生して、漠然と旋律そのものを示すこともある。その場合、普通は声楽の旋律を意味する。箏曲や三味線などの器楽の旋律は、「手」という別の用語を用いる。また、物語を歌詞として歌う「語り物音楽」の場合は、途中で用いられるコトバやセリフに対して、旋律性の強い歌



唱的な部分を「ふし」といったりもする。浪曲で、「一声二節三啖呵」と言ったりする場合はその例である。

「ふし」は、何らかの類型性を持つ旋律を意味する場合もある。たとえば、《平家物語》を琵琶伴奏で語る場合、冒頭の「祇園精舎の鐘の声」からは、「中音（ちゅうおん）」という緩やかなテンポの旋律型で、続く「奢れるもの久しからず」からは、低音域の「初重（しよじゅう）」という旋律型で歌われる。こうした旋律型も「ふし」と呼ぶ。

さらに、旋律そのものではなく、個人の声楽様式を表して、「義太夫節」とか「常磐津節」と言うこともある。音楽に限らず、

小泉節とか麻生節のように、個人的な話し方に「節」をつけるのも同様の用法である。

竹本義太夫や常磐津文字太夫の声楽様式は、人々の支持を得て伝承され、その結果、今日では種目名称となった。

小さな旋律を問題にするときには「小」をつけて「小ふし」などという。民謡の小ぶしはその例である。しかし、これを漢字で「小節」と書き、「しょうせつ」と読むと、旋律ではなく、むしろリズムに関わる用語になってくる。「節」という漢字が、中国では本来リズムに関する音楽用語として使われてきたからである。「節奏（せつそう）」という言葉がリズムの訳語として、一時期日本の洋楽界で用いられたのもそのためである。

今日の中国でも、旋律を表す文字は、「節」ではなく、むしろ「曲」なのである。

薦田治子(本学音楽学教授)

人生を決定づけた10歳の経験

●アリベルト・ライマン(作曲)●

昨年10月、一昨年の初来日に続き、《リア》の日本初演(日生劇場)に立ち会われるために来日なされた20世紀を代表する作曲家アリベルト・ライマン氏。二度目となった武蔵野音楽大学の公開講座にいらしてください



アリベルト・ライマン

Aribert Reimann

1936年、ベルリン生まれ。20世紀を代表する作曲家、ピアニスト。10歳の頃より作曲を始め、ベルリン芸術大学でボリス・ブラッヒャーのもとで作曲を、オットー・ラウシュのもとでピアノを学ぶ。1962年には自作のピアノ協奏曲1番を自身のソロで、ベルリン・フィル(指揮:H.W.ヘンツェ)と初演する。一方、1956年頃より著名な歌手たちと共演を重ね、なかでもD.フィッシャー・ディースカウとの共演は34年に及んだ。フィッシャー・ディースカウの提案で構想され、バイエルン国立歌劇場で1978年に世界初演されたオペラ《リア》によりライマンの名声は確固たるものとなった。《リア》は現代オペラには珍しく各地で上演が重ねられており、2013年11月に日本でも初演された。ベルリン芸術大学ではリートクラス(現代歌曲)の教授を務め(1983~1998)、彼のクラスからはC.シェーファーやA.パウニといった逸材が輩出している。プーメルリット科学・芸術勲章(1993)、ドイツ連邦共和国功労勲章(1995)、マクシミリアン勲章(2003)など受賞歴も数多い。

た際に、先生の音楽家人生や教育についてお話を伺いました。作曲家であり、また名歌手たちの良きパートナーであった先生を体現するように、そのお話は端々に至るまで明晰、知的、かつ配慮に満ちていました。超一流の人格に触れることができることの幸せを実感したひとときでした。(2013年10月31日インタビュー・文責:子安ゆかり)

いつか、 ここへ戻ってくる

——先生の幼少期について少しお話しいただけますか？

ライマン これは母に聞いた話ですが、私は生後11ヵ月で髄膜炎を患って入院していたこともあり、言葉を話し始めるのが遅かったようです。ただ、言葉を話し始めるよりも早く歌い始めたそうで、両親は「この子は音楽家になるだろう」と思ったそうです。父はベルリン大聖堂の正オルガニスト、母は非常に深い声のアルト歌手でした。そして共に戦後はベルリン芸術大学の教授となりました。

私自身5歳でリコーダーを、6歳でピアノを習い始め、音楽的な環境のもとで育ちました。しかし、その環境は長くは続きませんでした。小学校に入学後ほどなくしてベルリンは爆撃を受け、1944年には病院が爆撃され入院していた兄を失いました。そ

の後、両親と共に差し迫るロシア軍から逃げる毎日が続きました。ベルレベルクという町に着いたのが1945年5月7日、その翌日終戦を迎えました。

——悲惨な戦争体験をなさったのですね。その後、ベルリン芸術大学作曲科、およびピアノ科に進まれますが、先生にとって音楽家になる決め手となるきっかけはありましたか？

ライマン 私にとって決定的な出来事は、10歳の時にヘッベル劇場で上演されたK.ワイルの《承諾者》というオペラの主役を歌ったことです。私はボーイソプラノで大聖堂合唱団でも歌っていました。当時の私のお得意は、モーツァルトの“et carnatus est”^{*1}だったんですよ(笑)。オーディションの結果、私は主役の少年役に選ばれました。そこで生まれて初めて舞台に立つという経験をしたのです。2ヵ月に及ぶ練習期間、様々な技術や素晴らしい共演者たちなど全てが私に忘れ難い印象を与えました。その時に私は「いつか自分はここへ戻ってくる」と思ったのです。この「戻ってくる」が私にとってはオペラを作曲するということになりました。

そしてこの練習期間中に、私は初めて歌曲を作曲しました。ですから私にとってこの10歳の時の経験が、私の人生を決定づけました。さらに、12歳の頃より私は母の学生の伴奏を好んでするようになりました。この



▲ 自作のピアノ協奏曲初演のリハーサル。左は指揮者ヘンツェ。(1962年)

経験が私の歌曲作曲家、そしてリートピアニストとしての道につながりました。

1949年にストックホルムに5ヵ月間滞在したことも重要でした。戦禍を免れた街の信じ難いほどの美しさと教養豊かな暖かい家庭は、私を心身ともに健やかにしてくれました。また丁度ストリンダベリイ生誕100年展が開かれており、偉大な文豪の存在を知りました。特に彼の精神が持つ危うい側面が印象に残りました。後に私は彼の《夢の戯曲》と《幽霊ソナタ》をオペラ化しましたが、そのルーツはこの時の滞在にあります。

苦勞を重ねた 学生時代

——先生の学生時代についてお聞かせください。

ライマン E.ベッピングのもとで1年間徹底的に対位法を学んだ後、B.ブラッヒャーに師事しました。私が声を大にして言いたいことは、「作曲家を目指すなら対位法に習熟すべし」ということです。対位法にこそ全ての基礎があるのです。さて、1956年

にブラッヒャーのもとで新学期が始まりましたが、それは大変辛い学期でした。フルートとヴィオラのためのソナタが課題でしたが、第1楽章の展開部だけで20回も書き直しを命ぜられました。ほとんど嫌になり傷心のままダルムシュタット*2に出かけてみましたが、ここでも自分の道は見つからず悩み続けました。曲が書けなくて詩を書いていた時期もあります。そのことを先生に告げると、「だったら詩人になればいい」という始末です。私は苦しみ続けた結果、やはり絶対に作曲をしたいと決意し、第2楽章を持って行きました。その曲に目を通すと先生は「私はあなたにとって本当に作曲が必要なことなのか突き詰めさせたのだよ。でもこれで作曲はあなたにとって必要不可欠なものだと分かった。さあ勉強を始めよう」とおっしゃったのです。

——素晴らしいお話ですね。その後は順

調な学生生活となりましたか？

ライマン はい。ヴァイオリンソナタを作曲した時のことです。第1楽章の第2主題に、「これこそ私だ。私にはこうしかできない」と思う何かがありました。何も言わずに先生に見せると、「この4小節から発展させなさい。これがあなたの音楽言語になる」とおっしゃったのです。ブラッヒャーは天才的な作曲家であるのみならず、天才的な教育者でもありました。それぞれの学生の独創性をのばしたので、同じ門下でありながら誰も似ていませんでした。彼とは生涯にわたりお互いに新作を必ず見せ合うというような良い関係が続きました。

リートピアニスト、作曲家、 教育者として

——先生は長らくリートピアニストとして、名歌手のパートナーとしても活躍されました。共演者の方々に、歌手の声に触発されたことなど、お話しいただけますか？

ライマン 私は20歳の頃から歌手たちと共演しコンサートツアーを行いました。K.ガイヤー、E.ヘフリガー、J.キャロル、R.シュトライヒ、E.グリュンマー、B.ファスベンダーと



▲ フィッシャー・ディースカウ(右)と。



▲K. ガイヤーとのリハーサル。

いった歌手たちとの共演は素晴らしいものでした。私は彼らから音楽家としてのみならず多くのことを学びました。彼らとのツアーはとても楽しいものでしたよ。フィッシャー・ディースカウトとの共演は34年に及びました。彼ほどオペラ歌手として、またコンサート歌手として膨大なレパートリーを歌う傍ら現代音楽に取り組んだ人はいません。初見の作品を瞬時に理解してしまう様子は驚異的でした。ですから私にとって彼との共演はインスピレーションの源ともなり、本当に幸運なことでした。その他にもK. ガイヤー、E. ヘフリガー、J. キャロルといった名歌手たちの声やテクニックがインスピレーションの源となったケースがあります。そうして、彼らが初演者となった作品がたくさん生まれました。

—— 作曲家としてどれほどご活躍なさっているかについては、ここで改めてお聞きする必要もないくらいですが、先生はご自身のピアノ協奏曲

を初演なさったのをはじめ、ご自身の作品を多く初演していらっしゃいますね。ご自身の作品を他の人が演奏することについてどのようにお考えですか？

ライマン 私は自分の作品も初演しましたが、他の作曲家の作品も多く初演しています。私にとっては自分の作品を他のピアニストが演奏するのを聴くことは、常にうれしいことです。自分と少し違うなと思う部分があることもいいと思います。私の曲の初演を多く手掛けているアクセル・バウニ氏などは、私以上に私の作品を理解していると思います！

—— その後、大学で後進の指導に当たられていましたが、教育者としてはどのようなことを大切にいらっしゃいましたか？

ライマン 現代歌曲を中心とするリートクラスで教鞭を執りました。私にとって興味深かったのは、本人が気づいていない能力を見つけて引き出すことです。毎回「さてこの胡桃の殻をどのようにして割ろ



うかな」と考え、曲を与え集中的にレッスンします。すると、何日後かに「この曲が彼らのものになった」という瞬間が訪れるのです。それは学生のみならず、私にとっても幸せな瞬間です。なぜなら現代曲はまさに彼らの音楽であり、彼らこそ体现者なのですから。ある時、ハンブルク歌劇場で歌っている昔の教え子が電話でこう語りました。「私は夜の公演でスザンナ*3を歌う時には、午前中ウォーミングアップでウェーベルンのOp.23を歌います」これこそ私が目指すことです。

*1:ハ短調ミサ曲のソプラノの有名なアリア

*2:ダルムシュタット夏季現代音楽講習会

*3:モーツァルトのオペラ《フィガロの結婚》のソプラノの役



▲指揮者バレンボイム（中央）、ベルリン・フィルと新作初演のリハーサル。

平成25年度 後期定期演奏会を開催

昨秋、武蔵野音楽大学の管弦楽団、合唱団、ウィンドアンサンブルが1年間の学修成果の集大成として、学内外のホールで定期演奏会を開催しました。それぞれに熱演を繰り広げ、いずれの会場も満員となった聴衆から拍手喝采を浴び、成功裏のうちに平成25年度の演奏会シーズンを締めくくりました。



◎シンフォニックウィンドオーケストラ

管打楽器専攻学部2年生で構成されたシンフォニックウィンドオーケストラが、11月1日、本学バウハザールで演奏会を開催。前田 淳講師の指導のもと、チャンス：呪文と踊り、グレッグソン：剣と王冠など吹奏楽の名曲を披露しました。



◎武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団

本学管弦楽団合唱団が12月3日、バウハザール、4日、東京オペラシティコンサートホール（表紙）で演奏会を開催。ブルックナー：テ・デウム、ベートーヴェン：交響曲第9番二短調「合唱つき」のプログラムで、指揮に著名な飯守泰次郎氏を、合唱指揮に栗山文昭、ソリストには佐藤美枝子（Sop.）、河野めぐみ（Alt.）、水口 聡（Ten.）、堀内康雄（Bar.）、谷 友博（Bar.）ら、内外で活躍している本学教員・卒業生諸氏を迎えました。オーケストラ、ソリストの豊かな歌声、学生たちの清新なハーモニーが一体となり、テ・デウムは力強く荘厳な響きを、第九では歓喜の歌を高らかに謳い上げました。



◎武蔵野音楽大学管弦楽団

学部1、2年生で構成された、武蔵野音楽大学管弦楽団は、11月14日、埼玉会館大ホールでの「県民の日コンサート」（埼玉県主催）、続く11月17日、入間市市民会館で「市民コンサート」（主催：入間市立中央公民館）に出演しました。

作曲家、音楽教育家として活躍した埼玉県出身の音楽家、下総皖一の名を冠した音楽賞を2013年に受賞した北原幸男教授の指揮で、ベートーヴェン：序曲「コリオラン」、モーツァルト：ファゴット協奏曲、ドヴォルジャーク：交響曲第9番「新世界より」を演奏。ファゴット独奏は後藤亜蘭（音楽学部ヴィルトゥオーソ学科4年、学生オーディション合格者）が務めました。



◎室内管弦楽団

クルト・グントナー教授指揮の室内管弦楽団は、12月13日、本学ベートーヴェンホールで演奏会を開催。

今回は、オーボエの客員教授、インゴ・ゴリツキー氏を招き、青山聖樹（Ob.）岡崎耕治（Fg.）ら日本を代表するプレイヤーとの共演で、ゴリツキー氏がカンタータを編曲した珍しい三重協奏曲二長調、オーボエ協奏曲へ長調が含まれたバウハプログラムを披露しました。バウハの世界を存分に堪能できるプログラムとあって、聴衆は、柔らかなオーボエの音色と軽快なアンサンブルに魅了され、室内管弦楽の魅力溢れる一タとなりました。

◎ウィンドアンサンブル

ウィンドアンサンブルは、12月15日、藤岡市みかほみらい館（群馬県）、12月17日、東京オペラシティコンサートホールで演奏会を開催。指揮者は、本学に初めて着任されたバージニア州立大学教授、バンドディレクターのテリー・オースティン氏。

J. マッキー：シェルタリング・スカイ、D. グランサム：ファンタジー・ヴァリエーションなどのプログラムで、オースティン氏とともに創り上げた音楽性豊かな武蔵野サウンドを会場中に響かせました。

秋のコンサート・公開講座シリーズ

平成25年度の後半を飾る武蔵野の多彩なコンサート・公開講座が、秋色深まるなか開催され、教員や客員教授による演奏、学生演奏ともに芸術の秋に相応しく、実り豊かな内容となりました。

◎高校音楽科在校生と新卒業生によるコンサート (9月28日/王子ホール)

恒例となった武蔵野音楽大学附属高等学校音楽科在校生と新卒業生によるコンサート。ピアノ、管楽器、声楽専攻の在校生と卒業生による若さ溢れる爽やかな演奏に、満員の会場から拍手がおくられました。



◎本学教員による室内楽コンサート (10月8日/ベートーヴェンホール)

小池ちとせ (Pf.)、深山尚久 (Vn.)、安富 洋 (Va.)、三宅 進 (Vc.)、ツォルト・ティバイ (Cb.) ら第一線で活躍中の本学教員により、モーツァルト、シューマン、シューベルトの室内楽曲が息の合ったアンサンブルで格調高く演奏されました。



◎ペーター・ヤブロンスキー ピアノ公開講座 (10月30日/ベートーヴェンホール)

いま世界で注目のピアニスト、ペーター・ヤブロンスキー氏による公開講座。講座に先立ち、福井直昭教授によるインタビューが行われ、ヤブロンスキー氏の生い立ちや音楽を学ぶ学生へのメッセージなど気軽に話をされ、その後のマスタークラスでは、ヴィルトゥオーソ学科の学生、大学院生が受講。リストやラフマニノフの作品のレッスンが行われました。



◎武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会 (9月30日/ベートーヴェンホール)

バーバー、ブラームスなどの作品に加え、林光作曲の舞台のためのカンタータ「鼠たちの伝説」を合唱劇として上演。指揮に栗山文昭教授、演出に恵川智美講師、舞台照明は奥畑康夫講師が担当し、演技を交えたユニークで軽妙洒脱な公演となりました。



◎音楽学学科学生による企画コンサート (10月16日/モーツァルトホール)

音楽学学科学生による企画コンサート「フリードリヒ大王の音楽会“煌めくサン・スーシ宮殿の夕べ”」。17世紀の宮殿での演奏の優雅な様子を彷彿とさせる興味深い内容でした。



◎アリベルト・ライマン&アクセル・パウニ 公開講座(10月31日/モーツァルトホール)

昨年に引き続いて行われた現代作曲界の巨匠アリベルト・ライマン氏(本誌P6-8参照)と、現代歌曲のスペシャリストとして活躍するアクセル・パウニ氏による公開講座。ライマン氏の作品を中心に20/21世紀の歌曲について、学生たちが両氏から直接アドバイスを受けられる、貴重な機会となりました。

国立台湾師範大学が本学で演奏会開催

武蔵野音楽大学は、国立台湾師範大学と2011年、国際交流協定を締結しました。その交流事業の一環として、音楽学部部長の楊艾琳教授率いる国立台湾師範大学音楽学部室内オーケストラと女声合唱団（指揮：許瀟心女史）による演奏会が昨年9月7日、本学江古田キャンパスベートーヴェンホールにおいて行われました。「音楽・友好のかけ橋」と題したこの演奏会は、本学同窓会台湾支部長 辛永秀氏をはじめ多数の台湾の同窓生の方々、また台北駐日経済文

化代表処をはじめとする日台交流関係団体の協力を得て開催の運びとなり、当日は、大勢の来場者で満席となりました。

第一部は室内オーケストラによる演奏、チャイコフスキー《弦楽セレナーデ》に始まり、台湾の作曲家 李和甫による《台湾四季》が演奏されたあと、目に鮮やかなブルーの衣裳に身を包んだ女声合唱団が登場。台湾古謡を優雅に歌い舞う流麗な舞台が展開され、躍動感溢れる歌唱に魅了されました。

第二部ではオーケストラと女声合唱の共演となり、同大学の出身で今回も同行された著名な作曲家、柯芳隆氏の《2000年の夢》、ピアノ伴奏によるボルボラ、ブラームス、メンデルスゾーンの宗教曲、そして再度オーケストラと合唱の共演で情



緒豊かな《台湾民謡合唱組曲》と、多彩なプログラムが披露されました。

鳴り止まぬ拍手に応え、アンコール数曲を演奏しましたが、最後に「ふるさと」を女声合唱と聴衆とが一体となってオーケストラの伴奏で歌い、台湾と日本の心がひとつに解け合っ、感激と涙のうちに演奏会の幕を閉じました。



楽しく華やかに！ ミューズフェスティバル！

昨年10月、入間・江古田両キャンパスにて学園祭“ミューズフェスティバル”が「On stage」をテーマに開催されました。

入間キャンパスでの“第38回入間ミューズフェスティバル”は、江古田新キャンパスプロジェクトの進行に伴い、幼稚園、音楽教室、附属高等学校の生徒たちにより開催されました（10月19日、20日）。これまで熱心に練習や準備に励んできた演奏や作品発表に、訪れた方から大変好評をいただきました。

江古田キャンパスでは、62年の歴史を持つ“ミューズフェスティバル”が、今年は大学全学年が揃って開催されました（10月24日～27日）。季節外れの台風の直撃が心配されましたが無事に



開催の運びとなり、準備を進めてきた学生、教職員も一安心。学生たちは演奏や各クラブ、同好会、県人会による展示、模擬店などに進んで参加し、大学祭を大いに盛り上げていました。さらに今回は初の企画として、近在する日本大学芸術学部、武蔵大学、武蔵野音楽大学の3大学と練馬区が企画・協力した合同学園祭「江古田カレッジトライアングル」が行われ、大学相互のまた地域との交流を深めました。



● 表紙の顔



© 青柳聡

飯守泰次郎さん

現在、東京シティ・フィル桂冠名誉指揮者および関西フィル桂冠名誉指揮者を務める。桐朋学園で学んだ後、ヨーロッパで研鑽を積み、マンハイム市立歌劇場、ハンブルク州立歌劇場などの指揮者を歴任、オペラ指揮者として確固たる実績を築き上げる。また、1970年からはパイロイト音楽祭の音楽助手として、数々の歴史的公演に参加した。

'90年代より名古屋フィル常任指揮者、東京シティ・フィル常任指揮者、関西フィル常任指揮者を歴任。'12年9月から新国立劇場オペラ部門芸術参与に就任、'14年9月から同芸術監督に就任予定。

これまでに、第32回サントリー音楽賞、'04年 紫綬褒章、'08年 第43回大阪市民表彰、'10年 旭日小綬章、'12年度 日本芸術院賞などを受けている。また、'12年度の文化功労者に選ばれた。



❖ ニュー・ストリーム・コンサート ❖

～ヴィルトゥオーソ学科演奏会～

平成 25 年 11 月 12 日 トッパンホール

ヴィルトゥオーソ学科の選抜された学生たちがロマン派から現代曲まで幅広いプログラムで演奏し、日頃の成果を発揮して、会場から温かい声援をいただきました。



犬飼まお(ピアノ)



後藤亜蘭(ファゴット)



矢沢まどか(ヴァイオリン)



星野すみれ(フルート)



井山夏実(クラリネット)



福井敬介(ピアノ)

武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、江古田新キャンパス建設基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。 学校法人 武蔵野音楽学園

※ご芳名(五十音順)は、平成25年7月26日から10月8日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

【同窓生】

東 朝子様 五十嵐 緑様 池田響子様 磯貝容子様 梅原英理子様 大月裕子様 香月ハルカ様 加藤朝子様 金子朱實様
上岡保子様 久保田敬子様 齋藤善江様 下道ヨシ子様 関 絵里奈様 関 多美江様 高薄弥栄子様 田中路恵様 田辺
礼子様 戸畑和子様 戸張喜久江様 成田嘉恵様 尾藤尚美様 淵上初子様 三芳佳子様 村上喜久子様 吉村庸子様

【在学生・同ご父母】

神崎澄子様 佐藤善勝様 中嶋 清様 中村雅夫様 藤井秀裕様 松元定次様

【役員・教職員・一般・他】

石橋礼子様 今泉裕之様 加藤高德様 小森雅恵様 齋藤眞栄様 堺 康馬様 佐々木 素様 清水直美様 鈴木
亮子様 関根弘美様 耕 修二様 塚田雄二様 富樫英夫様 野村千秋様 箕田幸朗様 宮西麻衣様 渡辺亜紀様
(他に匿名を希望される方10名)

平成26年度 学生・生徒募集 入学試験スケジュール

武蔵野音楽大学大学院音楽研究科(博士後期課程)

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
大学院博士 後期課程入試	平成26年2月12日 ～21日消印	郵送のみ	平成26年 3月8日～10日

武蔵野音楽大学(別科)

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
別科入試	平成26年1月21日 ～28日消印	郵送のみ	平成26年 2月10日・11日

武蔵野音楽大学(音楽学部)

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
1年次一般入試 A日程※	平成26年1月15日 ～2月4日消印	平成26年 2月3日・4日	平成26年 2月18日～23日
1年次一般入試 B日程※	平成26年3月5日 ～14日必着	平成26年 3月14日	平成26年 3月16日～19日
3年次編・転入学入試	平成26年1月17日 ～24日消印	郵送のみ	平成26年 2月10日～12日

※音楽学部1年次入学試験合格者のうち、成績が特に優秀な学生合計約30名に対して、入学金相当額を「学修奨励金」として給付します。

●一般入試A日程およびB日程の受験では、国語・外国語(英または独)について、大学入試センター試験を利用できます。

武蔵野音楽大学附属高等学校(音楽科)

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
附属高等学校 推薦入試	平成26年 1月9日～17日必着	郵送のみ	平成26年1月22日 入間キャンパスにて実施
附属高等学校 一般入試	平成26年 1月23日～31日消印	郵送のみ	平成26年 2月10日・11日

*入学試験の詳細については、各入学試験要項でご確認ください。

*上記、入学試験は、江古田キャンパスで実施します。(附属高校推薦入試を除く)

*各入学試験要項は、郵送および江古田キャンパスで取り扱っています(要項・送料は無料)。要項の請求は、学園のホームページ、モバイルサイトの資料請求フォームからご請求ください。また、お電話、郵送にてご請求の場合は、氏名、住所、電話番号、および高校、大学1年次、大学3年次、大学院、別科の別をお知らせください。なお、受験講習会受講者には、第1年次入学試験要項を講習会期間中に配付します。武蔵野音楽学園広報企画室 〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1 TEL.03-3992-1125(広報企画室直通)

音楽教室(江古田・入間・多摩) 生徒募集のお知らせ

受験資格(平成26年3月末現在)

プレコース	3歳
スタンダードコース ソルフェージュコース	初級……………4歳から小学校1年生まで 中級……………小学校2年生から小学校6年生まで 上級……………中学校1年生から高等学校2年生まで
受験コース	武蔵野音楽大学附属高等学校受験 ……………中学校1、2年生 武蔵野音楽大学受験……………高等学校1、2、3年生
エクセレンスコース (将来、演奏家・音楽家を目指す 児童・生徒のための高度なコース)	5歳から高等学校2年生まで (江古田音楽教室のみに設置しています)

【入学試験】平成26年3月2日⑩10時(各音楽教室にて)

●ただし、エクセレンスコースの入学試験は江古田音楽教室で行います。

【願書受付】平成26年2月3日⑩～2月22日④

【試験科目】実技・ソルフェージュ・面接。未就学児は面接のみ。音楽をはじめ勉強される方は、音楽教室にお問い合わせください。エクセレンスコースの未就学児は、実技・ソルフェージュの試験を受けてください。

【要項請求】ご希望の音楽教室へお申し込みください。また、学園のホームページからも請求ができます(要項・送料とも無料)。

※その他詳細については、下記へお問い合わせください。

江古田音楽教室 TEL.03-3994-7536 入間音楽教室 TEL.04-2932-1111

多摩音楽教室 TEL.042-389-0711

武蔵野音楽大学附属音楽教室ホームページ

http://www.musashino-music.ac.jp/music_school/

栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

（順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの）

●瑞宝中綴章受章 奥田 操（本学名誉教授）

●第67回 全日本学生音楽コンクール 全国大会 声楽部門

大学の部 第3位入賞 井出 壮志朗（平成24年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学）

第3位入賞 川口 真貴子（平成25年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程1年次在学）

高校の部 第2位入賞 山崎 愛実（本高校3年次在学声楽専攻）

●第82回 日本音楽コンクール 声楽部門 入選

伊藤 晴（平成16年本大学院修士課程修了）

●第30回 日本管打楽器コンクール

トランペット部門 入選 林 辰則（平成16年大学卒トランペット専攻）

チューバ部門 入選 田中 優幸（平成14年大学卒チューバ専攻）

●第25回 日本ハーブコンクール2013 プロフェッショナル部門 第3位入賞

原 日向子（大学2年次在学ハーブ専攻）

●第16回 日本フルートコンヴェンション2013 in 高松 コンクール ピッコロ部門 第3位入賞

阿部 麻耶（平成12年大学卒フルート専攻）

●第67回 全日本学生音楽コンクール 東京大会本選 声楽部門 大学の部 第1位入賞 全国大会出場 和田 朝妃（平成24年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学）、第2位入賞 全国大会出場 井出 壮志朗（平成24年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学）、第3位入賞 全国大会出場 川口 真貴子（平成25年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程1年次在学）、奨励賞受賞 全国大会出場 塚村 紫（平成24年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学）、入選 照屋 篤紀（平成25年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程1年次在学）、舟橋 千尋（平成24年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学）、本橋 美波（平成24年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学）、高校の部 第3位入賞 全国大会出場 山崎 愛実（本高校3年次在学声楽専攻）、●第5回 東京国際声楽コンクール 歌曲部門 第1位入賞 審査員特別賞受賞 川口 真貴子（平成25年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程1年次在学）、●2013 アジア国際音楽コンクール 大学生ピアノ部門 第1位入賞 福井 敬介（大学4年次在学ピアノ専攻）、●第16回 “長江杯” 国際音楽コンクール 管楽器部門 大学の部 第1位入賞 鈴木 愛（大学1年次在学フルート専攻）、ピアノ部門 高校の部 第1位入賞 石川 愛（本高校2年次在学ピアノ専攻）、第2位入賞 林 麗子（本高校3年次在学ピアノ専攻）、一般の部B 第4位入賞 秋山 美穂子（平成元年大学卒ピアノ専攻）、●第33回 エターナルピアノコンクール PF 専門課程部門 第2位入賞（1位なし） 橋本 あすか（大学3年次在学ピアノ専攻）、●第15回 ブルクハルト国際音楽コンクール ピアノ部門 第2位入賞（1位なし） 秋山 美穂子（平成元年大学卒ピアノ専攻）、●第14回 大阪国際音楽コンクール 管楽器部門木管 Age-U 第2位入賞 信太 ななみ（大学3年次在学サクソフーン専攻）、アンサンブル部門 第3位入賞（1位なし） 三浦 こと美（大学3年次在学クラリネット専攻）、民俗楽器部門 アブニール賞受賞 古家 啓史（大学2年次在学マリンバ専攻 本高校卒）、●第7回 横浜国際音楽コンクール ピアノ部門 一般Bの部 第2位入賞、一般Aの部 第3位入賞 秋山 美穂子（平成元年大学卒ピアノ専攻）、●第66回 岩手芸術祭音楽部門ピアノコンクール&演奏会 一般部門 第3位奨励賞受賞 上田 菜緒（大学2年次在学ピアノ専攻）、●第9回 ルーマニア国際音楽コンクール 打楽器部門 第3位入賞 榎本 麻佑（大学4年次在学打楽器専攻）、●第25回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 声楽部門 大学生の部 第5位入賞 三宅 里菜（大学2年次在学声楽専攻）、ピアノ部門 高校生の部 第5位入賞 市村 ひかり（本高校2年次在学ピアノ専攻）、大学生の部 審査員賞受賞 赤尾 優梨子（大学2年次在学ピアノ専攻）、弦楽器部門 大学生の部 奨励賞受賞 富樫 イリナ（大学1年次在学ヴァイオリン専攻）、●第57回 TIAA 全日本クラシック音楽コンサート 奨励賞受賞 白石 絵理（平成20年大学卒ピアノ専攻 本高校卒）、●第21回 ヤングアーティストピアノコンクール デュオ部門 2台ピアノグループ 奨励賞受賞 當間 愛（平成25年大学卒ピアノ専攻 本別科在学）／當間 舞（本高校2年次在学ピアノ専攻）、ピアノ独奏部門 E2グループ 優秀奨励賞受賞 乗田 晏妙（本高校2年次在学ピアノ専攻）、●第17回 PIARA ピアノコンクール シニアC部門 アポロ奨励賞受賞 藤城 夏芽（平成25年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学）、●第15回 日本演奏家コンクール ピアノ部門 大学の部 奨励賞受賞 橋本 あすか（大学3年次在学ピアノ専攻）、●第14回 ANPル・ブリアンフランス音楽コンクール 奨励賞受賞 鈴木 愛（大学1年次在学フルート専攻）、●第21回ペトロフピアノコンクール 高校生部門 審査員賞受賞 市村 ひかり（本高校2年次在学ピアノ専攻）

※上記の他多数。大学ホームページをご覧ください。

編集後記

TOMORROWの新年号を彩ってくださったのは、芥川賞作家の平野啓一郎氏と、現代ドイツを代表する作曲家のアリベルト・ライマン氏。若くしてその才能を見出されたお二人。神童と呼ばれたデビュー当時から意欲的な作品を次々と発表している平野氏、かたやライマン氏

は80歳近いというご高齢にもかかわらず、現在も精力的に創作活動をつづけていらっしゃいます。

今年の干支は「うま」。パワフルなお二人を見習って、草原を疾駆する馬のごとく夢に向かって走りつづける一年にしたいものです（編）。

三味線

12代 石村近江作 天保13(1842)年 日本 全長 96cm

江戸時代、三味線の名工として代々続いた石村近江は、時に「三味線のストラディヴァリウス」とも呼ばれる。その近江の中でも初期のものは、特に「古近江」と呼ばれて昔から珍重されてきた。

「古近江と しらず弾いている ひんのよさ」

「古近江で 岡崎を弾く お姫様」

「古近江の 糸まだいいのに かけかえる」

いずれも「古近江」を詠った川柳である。「岡崎」というのは初心者が最初に習う曲で、さしずめ、「ストラディヴァリウスで、教則本を弾く、お姫様」といった感覚であろうか。三味線は、江戸時代に歌舞伎と結びついて、庶民を中心に人気を博していったが、この「古近江」ブランドは、庶民にとってはなかなか手の届かぬ憧れの存在であったことが、これらの川柳からも窺うことができる。

石村近江一族の詳細については、文献によっても諸説あるが、今日、高級な三味線には必ずと言っていいほど入れられる胴内部の「綾杉」と呼ばれる彫りは、もともと鼓職人の家であった石村近江家が、鼓胴の彫りを三味線に応用したのが始まりであると言われている。

写真の楽器に附属されている証書(写真①)にも、「この楽器の綾杉技法は、先師から正統的に伝えられたものである」ということが製作者自身によって記されている。

棹は檜材で、表面は紅木の薄材で面剥ぎがされた「薬研彫り」と呼ばれる特殊なつくりである(写真②)。薬研彫りとは、上面・側面のどちらから見ても異なる二種の材が



見えないように、出会う部分の角が直角ではなく、折半してはめ込まれているという精巧な細工のことで、高い技術が求められ、残存する近江の三味線の中でも稀少なものである。また、棹下部(写真③)と胴には、製作者を表した焼印が入れられている。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)

江古田キャンパス楽器博物館休館のお知らせ

「江古田キャンパス楽器博物館」は、リニューアルオープンに向けて、現在休館中です。なお、「入間キャンパス楽器博物館」及び「パルナソス多摩楽器展示室」は通常通り開館しています。休館中は、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解いただきますよう、お願い申し上げます。

❖ 目次 ❖

- 謹賀新年 福井直敬 ①
- 我流の音楽愛 平野啓一郎 ②
- 音楽の万華鏡 ⑤
- 音楽用語としての「節」— メロディカリズムか — 薦田治子
- 海外音楽事情 ⑥
- 人生を決定づけた10歳の経験 アリベルト・ライマン
- MUSASHINO NEWS ⑨
- ❖平成25年度 後期定期演奏会を開催
- ❖秋のコンサート・公開講座シリーズ
- ❖国立台湾師範大学が本学で演奏会開催
- ❖楽しく華やかに！ ミュースフェスティバル！
- ❖武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々
- ❖平成26年度 学生・生徒募集 入学試験スケジュール
- ❖音楽教室(江古田・入間・多摩) 生徒募集のお知らせ
- ❖栄冠おめでとう！(コンクール入賞者等)

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学別科

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖ 発行 ❖

学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111 (代表)

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2014年1月10日発行 通巻第108号



モバイルサイト
<http://musaon.jp/>